

## 清きエンジニア・廣井勇の銅像建立



ほつたともお\*  
堀田朋男\*



キーワード：廣井勇，廣井山脈，佐川町，銅像建立，小樽港北防波堤，テストピース

### はじめに

2023年前期のNHK連続テレビ小説は「らんまん」に決まった。モデルは高知県高岡郡佐川町出身の植物学者、牧野富太郎である。高知県は牧野フィーバーに沸いている。そんな牧野と同じ年に、同じ佐川町で生を受けた土木偉人がいる。工学博士・廣井勇である。

世界最大級の烏山頭ダムを造り、不毛地帯であった台湾南部の嘉南平原を大穀倉地帯へ変え、生涯を台湾の民衆に捧げた八田與一、パナマ運河建設に携わった唯一の日本人である青山士、世界最大規模の水豊ダムを建設した久保田豊など、日本のみならず世界で活躍した多くの土木偉人のルーツを調べると、必ず辿り着く人物、それが廣井である。

高知県で絶大な知名度を誇る牧野に比べ、廣井は功績どころかその名さえもほとんど知られていない。

そのような状況を憂慮し、「廣井勇を顕彰する会」では、廣井の功績と人となりを広く知らしめるために、廣井の故郷である佐川町に銅像を建立した（写真-1）。

本稿では、顕彰する会立ち上げの経緯と銅像建立までの活動を報告する。なお、活動について興味を持たれた方には、当会のホームページ<sup>1)</sup>をご覧いただきたい。



写真-1 佐川町に建立された廣井勇銅像

### 1. 工学博士・廣井勇とは

廣井勇（写真-2）は、文久2（1862）年、土佐国高岡郡佐川村（現在の高知県高岡郡佐川町）の藩士である廣井家の長男として生を受けた。幼い頃に父を亡くしたが、学問を修める志を持ち、叔父に連れられ家族と離れて上京した。明治10（1877）年、札幌農学校（現在の北海道大学）に二期生として最年少で入学した。同級生には内村鑑三、新渡戸稻造がいた。

廣井は札幌農学校を卒業した後、アメリカ、ドイツへの留学を経て、教授として母校

\*廣井勇を顕彰する会 事務局長／株式会社第一コンサルタンツ 防災まちづくり課

で教鞭を執り、後輩を育成することとなつた。その後、同校工学部廃止に伴い、北海道庁技師となり、後に小樽築港事務所長に就任して小樽築港に携わった。

明治32（1899）年、東京帝国大学工学部の教授として迎えられた廣井は、「廣井山脈」と呼ばれる土木偉人を次々と育てていった。東京大学名誉教授の故高橋裕氏や、『評伝

山に向かいて目を擧ぐ 工学博士・廣井勇の生涯』の著者である高崎哲郎氏は、「廣井の最も偉大な功績が、この優秀な人材の育成であった」と評している。

昭和3（1928）年に66歳で生涯を閉じた廣井の葬儀では、旧友の内村鑑三が追悼を述べている。内村はその追悼で、廣井を「清きエンジニア」と称し、最大限の賛辞を送った。佐川町に建立した銅像の台座には、追悼の一文が次のように刻まれている（写真－3）。

「君の工学は君自身を益せずして国家と社会と民衆とを永久に益したのであります」

## 2. 「廣井勇を顕彰する会」の設立

平成29年8月21日、廣井を知る人の少ない状況を憂慮した産学官民の有志約20名が、顕



北海道開発局 所蔵  
写真－2 廣井勇  
(1862-1928)

彰する会を立ち上げて故郷の佐川町に銅像を建立すべく一同に会した。その中には、廣井山脈に連なる、コンクリート工学の権威である岡村甫氏（東京大学名誉教授、高知工科大学第二代学長）、港湾・海洋学の権威である磯部雅彦氏（高知工科大学第三代学長）の姿もあった。その場で顕彰する会準備委員会を発足し、発起人代表は岡村氏に務めていたこととなった。

平成30年5月14日、設立総会を開催し、顕彰する会が発足した（写真－4）。会長には岡村氏が就任し、副会長には磯部氏、佐川町長（当時）の堀見和道氏、高知県橋梁会会长の右城猛氏、高知県建設業協会会长（当時）の吉村文次氏が選出された。

同日には設立記念シンポジウムも開催され、地域の学生を含む380名もの参加者が詰めかけた。シンポジウムの内容は、廣井の門下生である八田與一の生涯をまとめた『台湾を愛した日本人』の著者である古川勝三氏による、「土佐が生んだ土木偉人 廣井勇に学ぶ」と題した記念講演と、学生4名による廣井門下生の功績についての発表の二部構成であった。当時の様子は新聞やテレビでも報道され、県内における反響も大きかった。

## 3. 北海道視察

廣井の大きな功績の一つが、北海道小樽港の北防波堤建設である。明治41年の竣工から110年を超えた今なお、この防波堤は荒波か



写真－3 銅像台座の碑文



ら小樽港を守り続けている。この工事で用いたコンクリートには火山灰が使用され、その強度試験のために6万個のテストピースが製作された（写真－5）。明治29年から100年以上、このテストピースを用いて、防波堤に使用されたコンクリートの強度試験が定期的に実施された。自らの死後まで責任を持つべきことを、このテストピースの強度試験で示したのである。

廣井を深く理解し、顕彰する会の活動を加速させることを目的に、廣井の功績が色濃く残っている北海道への視察団を結成し、札幌市と小樽市を訪問することとした。しかし、事務局では北海道との繋がりがなかった。途方に暮れていたときに、救いの手を差し伸べてくれたのが手島肇氏である。

手島氏は、廣井と同じ北海道大学を卒業され、関西小樽会会長であり、小樽ふれあい観光大使として活躍されている。有志で大学の偉人を調べ、足跡を辿る活動をしており、の中には廣井も含まれ、大変尊敬していると



写真-5 コンクリート強度試験テストピース



写真-6 手島氏（左から2番目）との面談

のことであった。顕彰する会が設立されたことを人づてに知るやいなや、手島氏はいても立ってもいられず、大阪から高知まで我々に会いにこられ、様々な手助けを得られることとなった（写真－6）。手島氏の仲立ちにより、小樽市の追はざまとし哉市長への表敬訪問も実現した。

北海道視察での主な訪問先は、廣井が卒業し、教授としても教鞭を執った「北海道大学（旧札幌農学校）」（写真－7）、廣井の胸像が建立されている「運河公園」（写真－8）、小樽港建設の貴重な資料を閲覧でき、乗船して北防波堤を間近に視察できる「おたるみなし資料館」（写真－9）、廣井が建設工事の指揮をした北防波堤が一望できる「手宮公園」（写真－10）、小樽市役所（写真－11）などであった。

第1回視察団は岡村会長を団長とする総勢19名が平成30年8月に、第2回視察団は堀見副会長を団長とする総勢10名が令和元年7月にそれぞれ北海道へ赴いた。いずれの訪問地



写真-7 北海道大学視察の様子



写真-8 運河公園の廣井勇胸像



写真-9 乗船による北防波堤視察



写真-12 銅像制作者 大野良一氏



写真-10 手宮公園から望む北防波堤



写真-11 小樽市長表敬訪問

においても視察団は歓待された。廣井がどれほど大きな存在であるかを知る機会となり、以降の活動に大いに役立った。

#### 4. 銅像建立に向けた活動

当会発足後、銅像建立に向けて会議を何度も開催した。解決すべき課題は、銅像制作者の決定と銅像建立資金の調達であった。当会では、銅像制作チームと資金調達チームの二手に分かれて情報収集から始めることとした。

#### 4.1 銅像制作者の選定と銅像制作

銅像制作においては、平成30年7月にオープンした「オーテピア高知図書館」敷地内に建立されている寺田寅彦銅像建立の経緯を参考とし、その制作者である大野良一氏に相談することとした（写真-12）。

平成30年8月、我々は高知県吾川郡仁淀川町に所在する、大野氏のアトリエを訪問した。仁淀川町は、北に四国山地がそびえ、近年「仁淀ブルー」とメディアにも取り上げられる仁淀川が東西に流れる自然豊かな場所である。アトリエには、大野氏が自然や人物をモチーフにした、様々な作品が所狭しと置かれていた。

大野氏に銅像制作の信条を聞いたところ、対象とする人物の外見を似せるだけではなく、そのエピソードを調べ尽くし、醸し出す雰囲気まで表現することであった。さらに大野氏は、新聞記事にて当会が発足したことを探り、廣井の銅像を自分の手で制作してみたいと思っていたそうである。大野氏こそが銅像制作にふさわしい人物であると確信し、制作を依頼することになった。

廣井の銅像制作にあたり、大野氏の活動は情熱的かつスピーディであった。廣井に関するあらゆる資料を調べるだけでなく、顕彰する会の北海道視察団にも参加した。

我々が大野氏のアトリエを訪問するたびに銅像制作は進み、北海道視察から1年も経過せずに石膏原型が制作された。できあがった



写真-13 銅像と石膏原型

石膏原型は金沢の銅像铸造所へ送られ、令和3年2月、大野氏のアトリエに完成した銅像が届けられた（写真-13）。

#### 4.2 銅像建立における募金活動

銅像建立には、1,000万円が必要であった。建立に際し、多くの人に携わってもらいたいという想いから、その資金は企業及び個人の寄附金により調達することとなった。

銅像の寄附を募る上で寄附控除ができるか否かは重要である。国や地方公共団体、特定法人等に特定寄付金を支出した場合、所得控除を受けられ、寄附者の負担軽減になる。当会は任意団体であり、寄附控除を受けるためにはかなりの手続きを要した。最終的には、建立した銅像と寄附金残額を全て佐川町に寄附することを条件として、寄附控除が認められることとなった。

令和元年5月23日に開催された総会で募金開始の承認が得られた。同日の設立1周年記念講演では、銅像制作の大野氏に「土木技術者廣井勇をいかに伝えるか」と題して講演いただき、銅像建立の活動が広く知られることがとなった。

寄附の募集期間は令和元年7月から令和2年6月末日までの1年間であった。募金開始

からまもなくして目標額を超え、最終的には目標を大きく上回る15,090,300円が集まった。寄附者は日本全国の個人・法人合わせて1,037者になった。廣井に連なる著名な技術者や教育者からの寄附も多かった。銅像建立の期待の大きさと注目度の高さが示される結果であった。

#### 5. 銅像建立除幕式

顕彰する会を発足した当初から、銅像建立時には、除幕式、記念式典、記念講演、祝賀会を盛大に開催する計画を立てていた。しかし、新型コロナウイルスが猛威を振るい、企画していたイベントの大部分は中止を余儀なくされた。唯一開催できたのは、佐川町及び当会の関係者に限定した、除幕式だけであった。

令和3年4月17日、当会役員及び町関係者約40名が見守る中、廣井勇銅像の除幕式を執り行った。

除幕式は、佐川町長（当時）の堀見氏による挨拶で始まった。堀見氏も顕彰する会副会長として、第2回視察団に参加し、小樽市長との面会を果たしている。佐川町に同日落成式が開催された観光拠点「うえまち駅」には、堀見氏の尽力により、廣井の展示ブースが設置され、小樽港湾事務所から借り受けたテストピースが飾られることになった（写真-14）。

顕彰する会の岡村会長より、銅像及び寄附



写真-14 うえまち駅の廣井勇展示ブース



写真-15 廣井勇銅像の除幕風景

金残額が佐川町に贈呈され、いよいよ廣井勇銅像の除幕である。銅像建立に携わった功労者約10名がロープを引いた瞬間、銅像が参加者にお披露目された。この日、佐川町に新たな土木の聖地が誕生したのである（写真-15）。

## 6. 顕彰する会の活動

銅像建立活動と並行して、顕彰する会では様々な活動によって廣井の功績を伝えてきた。その中の一つを紹介する。

廣井の出身地にある佐川中学校では、地域の偉人を学習する授業がある。廣井の紹介をして欲しいと当会に依頼があった。令和3年3月18日、当会役員であり、佐川中学校出身の安田省治氏が「廣井勇の功績を訪ねて」と題した講演を行った（写真-16）。生徒たち



写真-16 安田氏による講演の様子

は熱心に耳を傾け、講演後の質疑応答は非常に活発であった。廣井の生き様は生徒に感動を与えたに違いない。

## おわりに

顕彰する会発足から3年で銅像建立という大きな目標を達成し、令和3年8月末日をもって解散した。しかし、今でも土木関係者だけでなくマスコミや一般の方からたくさんの問い合わせをいただいている。そのたびに、廣井の存在の大きさに驚きつつ、銅像建立に携われた喜びを感じている。

地球環境の変化による風水害の激甚化や、壊滅的な被害が予測されている南海トラフ地震や首都直下型地震などの巨大災害から国土を守り、わが国が今後さらなる発展を遂げるためには、土木技術者が果たすべき役割は大きいといえる。このような時代だからこそ、廣井の精神を受け継ぎ、後世へと繋いでいかなければならぬ。

佐川町では、令和3年度より、小学校の副読本に廣井が紹介されるようになった。清きエンジニアである廣井の生き方は、佐川町の子どもたちの道しるべとなるであろう。

銅像建立を契機に、廣井の偉業が広く知れ渡り、わが国のみならず世界に羽ばたいていくことを願ってやまない。

## 参考文献

- 1) 廣井勇を顕彰する会  
<https://www.hiroi-isami.com/>
- 2) 高崎哲郎『評伝 山に向かいて目を挙ぐ 工学博士・廣井勇の生涯』鹿島出版会
- 3) 高橋裕『土木技術者の気概 廣井勇とその弟子たち』鹿島出版会
- 4) 田村喜子『夢追いびとたちの系譜 土木のころ』現代書林

